

現代社会の中で生きている私たちは、衣食住に困ることは少なく、世界一の長寿国になり、清潔な環境でそこそこ健康、またあらゆる方面において不便や不快の少ない状態にあります。それらは、私たちの先輩方が、そうなれば幸せになるはずだと、目指し努力し実現してきたものです。そしてその実現にあたって最も力を持つのは経済力であると、経済発展最優先で進んできました。

かつては、そんな恵まれた状態を「まるで天人のようだ」と表現していたものです。しかし、仏教の考え方では、その天人の世界は、「地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・人道・天道」という「六道」の最上位ではあるものの、それは迷いの世界の中の話であって、私たちの根本的な苦悩が解決され、他のいのちと共に安心して生きていける、そういう状態では全くないのです。

釈尊（お釈迦様）は、国王の家に生まれ、財力も権力も地位もあつて、当時考えられる最高レベルの贅沢な生活をしておられました。しかし、そこには本当の幸福はないと、その一切を捨てて、城を出て沙門（自由な出家修行者）となりました。人間の社会にとつて、内政・外交という政治力や経済力や武力や、その裏付けとなる科学的知見は大切であり、発展させねばならないでしょう。しかし、一人ひとりの人間の根本的苦悩はそれらによつては解決しません。本当のところ、私たちが最後の最後に本当によりどころとなるものは何なのか。いつでもどこでも誰でも安心して生き、安心して死んでいける、そういう一切を支える大地はどこにあるのか。

私たちは、釈尊が目覚めた真実から目をそむけ、今も釈尊が捨て去つたものを獲得しようとして進んでいます。二〇〇六年にイギリスのレスター大学のエードリアン・ホワイト氏がイギリスのシンクタンクのデータをベースに、約八万人の聞き取り調査を行った各種国際機関（ユネスコ、WHOなど）の発表済み報告書百種以上を分析して、各国の国民の幸福度を順位付けしています。世界有数の経済大国日本は、どのあたりに位置するでしょう。なんと一七八カ国中九〇位です。ちなみに先進経済大国で上位二十カ国にランクインしている国はありません。アメリカ二十三位、ドイツ三十五位、イギリス四十一位、フランス六十二位、中国八十二位です。

さて仏教では、その天人が長寿の末に迎える死の直前に現れる五つの兆しを「天人五衰」といいます。『正法念経』によると、この天人の五衰の時の苦悩は、地獄で受ける苦しみと遙かに上回ると説かれています。五衰とは、まず「衣裳垢膩」衣服が垢で油染みたように見える。つまり生活の中で輝きを失い、手応えや実感が薄い様子でしょうか。次に「頭上華萎」頭の上の飾りが萎えるということは、誇りを失うことでしょうか。三番目は「身体臭穢」体が薄汚れて臭くなり、健康不安になっていく。四番目は「脇下汗出」脇の下から汗が流れ出、自信を失い気力も萎えていく。そして五番目が「不樂本座」今与えられている（恵まれた）境遇を、喜ぶことも楽しむこともできなくなる。

天人になると、現前の恵まれた境遇のわずかでも損なわれると大変な苦痛になるに違いないと、失うことマイナスになることから逃げ回るといふ人生になっていきます。若さや健康が衰えないように、豊かな経済生活を失わないように、相対的な地位が下がらないように。総じて言えば「生きる」ことよりも「死なない」ことが優先されるようになっていきます。

目指していた天人の世界が行き詰まり、それは人間に豊かで喜びや手応えのある本当の人生をもたらすものでないと気づかされる現代、もう一度、私にとつての最重要課題は何か、根本問題は何かということに、目を向けていかななくてはならないと思わずにいられません。